

仙台平野 災害の歴史を学ぼう

私たちが住む仙台平野は、巨大な地震や津波に繰り返し襲われてきた。過去の地震や津波による災害の記録や痕跡を学び、仙台の自然災害の歴史について地震を中心に考えてみよう。

1 弥生時代の津波

仙台市若林区荒井にある沓形遺跡の発掘調査では、津波で運ばれた砂で埋まった弥生時代の水田が発見されている。遺跡は現在の海岸線から約4 km内陸にある。当時の海岸線からも2 km内陸にあることから、この津波では2 km以上先まで浸水したということになる。



沓形遺跡の位置 (東北学院大学提供)

2 貞観地震と津波 (平安時代)

869 (貞観11) 年5月26日、東北地方太平洋沿岸を、巨大な地震と津波が襲った。当時の歴史書『日本三代実録』には、大地に亀裂が入り、津波で1,000人以上の死者が出たことが記されている。震災後の記録では、多賀城や陸奥国分寺にも大きな被害が出たことが分かっている。近年のボーリング調査によると、仙台平野の海岸では、当時の海岸線から2~4 km浸水したという分析結果も出ている。



貞観地震と東北地方太平洋沖地震との津波浸水域の比較 (穴倉正展著「次の巨大地震はどこか」宮帯出版社)

3 慶長三陸地震 (江戸時代)

1611 (慶長16) 年10月28日、仙台藩の領内で大地震と津波が起こり、多くの被害があったことが分かっている。徳川家康の行動を記録した『駿府政事録』11月晦日条によると、伊達政宗領内で大きな波がきて海沿いの家屋がごとごとく流失したこと、溺死者は5,000人ほどいたこと、これが津波というものだということが記されている。この書物で、「津波」という言葉が初めて使われたとされている。このとき、岩沼付近では当時の海岸線より4 km内陸まで浸水している。



「駿府政事録」11月晦日条 (東北大学附属図書館所蔵)

4 浪分神社

仙台平野には、津波にまつわる伝承が、いくつか残されている。仙台市若林区霞目にある浪分神社も、その一つである。伝承によると、津波で多くの溺死者が出た際、白馬にまたがった海神が現れて波を二分して鎮めたことから、こう呼ばれるようになったと言われている。以前は、現在地より500mほど東にあったが、1835 (天保6) 年に現在地に移されたという。



過去の天津波を伝える浪分神社

5 近代以降の地震による被害

近代以降も巨大地震・津波は、たびたび仙台平野を含む東北地方太平洋側を襲っている。明治三陸地震津波 (1896年) では、死者・行方不明者約22,000人、昭和三陸地震 (1933年) では、死者・行方不明者3,064人の被害が出ている。その他の地震や災害についてはP62「仙台の自然災害年表」を見てみよう。

? 調べよう

- 仙台の災害の歴史について、まとめてみよう。
- 自分たちの地域で自然災害に関係する施設や伝承等がないか、調査してみよう。